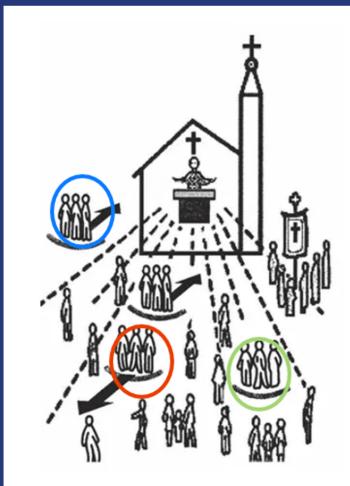


活動団体中心の教会



左の図は、活動団体中心の小教区の姿を表し、その活動団体を3種類に分類している。

聖堂へ向かう→の団体

小教区のために活動する団体

例、ミサや葬儀などの解説、
聖書朗読、病人訪問担当

外へ向かう→の団体

小教区及び超小教区的な出来事・
事柄へ対応する活動団体

例、近隣小教区の信徒との協働
活動、正義と平和に関わる活動、
滞日外国人支援活動、ホームレス
のための奉仕活動

→のついていない団体

信徒としての個人的成长をめざした
活動団体

例、教理の学習会、聖書研究会、
共にロザリオを唱える会

*活動団体の存在意義

小教区の活性化と成長

活動団体

小教区内外に助けを必要とする人を見つけて、彼らの必要を満たすための協力へつながる

信徒がそれぞれのタレントに応じた活動に参加できる。
ある人は自分自身の成長のため、
ある人は小教区のため、また
ある人は小教区を超えた活動のために働いている。

そして、活動団体の働きを通して、多くの信徒が教会活動に参加可能となる。その活動を続けていく中で、「主任司祭を助ける」というよりも、「教会である自分たち自身の使命に生きる」という考えに変わっていく。

「活動団体」とは？

「カトリック・アクション」からきている。

教皇ピオ12世が、信徒の教会内活動を「カトリック・アクション」と呼び、1957年開催「カトリック・アクション第二回世界會議」において、「カトリック・アクション」とは「信徒使徒職」のこと、「位階上の使徒職」とはならないと説明し、洗礼によりすべての信徒に授けられる使命の範囲を示される。

そして、ヨハネ23世により開催された第二バチカン公会議において、最終会期に「信徒使徒職に関する教令」という形でまとめられ、その重要性がより強調されることになった。

日本の教会も戦後、このような世界の潮流に対応し、信徒使徒職活動に大きな力を注いだ。

鹿児島教区においても1979年に「鹿児島教区信徒使徒職協議会」が設立され、教区内での活動も盛んになった。しかし、時を経た今、活動団体は数えるほどしか存在せず、会員も団体設立時のメンバーのままという団体もある。

*活動団体中心の小教区の問題点

活動団体中心の小教区では、信徒たちが常に活動し、活動が活発であるほど、司祭たちは、その対応に忙殺されていく。主な問題点としては、右記の2点

第1の問題点、
「燃え尽き症候群」の増加、特に活動団体のリーダーの立場にある方々。

第2の問題点、
活動団体が大いに活動している小教区であっても、実際に活動へ参加する信徒の数は少なく、次第にそのメンバーも限られてくる。